

認知症に関する地域づくりを推進するための 若い世代への認知症啓発に関する研究事業



認知症に関する地域づくりを推進するための 若い世代への認知症啓発に関する研究事業

主任研究者 小長谷 陽子 (認知症介護研究・研修大府センター研究部)
分担研究者 鈴木 亮子 (広島国際大学 心理科学部)

A. 背景と目的

認知症に関する認識や知識はメディアで取り上げられる頻度が増えるにつれ、社会一般に広がりつつある。高校生、大学生などの若い世代にとっても「認知症」という言葉を聞く機会は増えている。その一方で、生活状況としては核家族化が進み、高齢者と生活する機会は減っている。そのため、「認知症」という言葉そのものは聞いたことがあっても、実体験を伴った正しい理解をする機会は決して多くない。また、若年性認知症に関しては、高校生、大学生の親が罹患する可能性もあり、若年性認知症を含め認知症について知ることは若い世代にとっても重要なことである。今後、認知症患者の数は増加の一途であり、これからの担い手となる若い世代に、認知症の正しい知識を早くから伝えることは重要なことである。よって、一昨年、昨年に引き続き、本研究では若い世代の中でも高校生を取り上げ、認知症に関する授業を実施し、それによる高校生の意識の変化について検討することを目的とした。

B. 方法

1) 対象者

高校2年生 297名 (女子)。

2) 授業の実施方法

総合授業として認知症に関する講義を90分実施し、テキストとしては大府センターが高校生・大学生向けに作成した認知症啓発のためのパンフレット「認知症ってなんだろう」を使用した。

3) アンケート実施

授業前後でアンケート（添付資料）を実施した。授業前後での意識の変化が見られるよう、共通の項目部分を設けるなどして作成した。

以下に、授業前後のアンケートの項目を比較した表を示す。

4) 倫理的配慮

アンケート実施に関して倫理的配慮について説明し、同意をする場合のみ記入することとした。アンケートは無記名で行い、個人が特定されないよう配慮した。

■ 授業前後で同じ項目の部分

質問項目一覧	
授業前	授業後
問1 認知症について知っているか	
問2 若年性認知症について知っているか	
問3 家族など身近に認知症の人がいたかどうか	
問4 認知症の人が身近にいた場合、同居家族かどうか	
問5 認知症に対するイメージ 自由記述)	
	問1 認知症の授業はためになったか
	問2 「ためになった」と感じた理由 自由記述)
	問3 「ためにならなかった」と感じた理由 自由記述)
問6 認知症の基本的知識が高校生にも必要かどうか	問4 認知症の基本的知識が高校生にも必要かどうか
	問5 認知症に関して知っていたほうが良いと思うことや知りたいこと 自由記述)
問7① 認知症ともの忘れは同じである	問6① 認知症ともの忘れは同じである
問7② 認知症になった本人は、何もわからないから楽である	問6② 認知症になった本人は、何もわからないから楽である
問7③ 認知症の方には、子どもと接するように接したほうがよい	問6③ 認知症の方には、子どもと接するように接したほうがよい
問7④ 認知症になると、いろいろな気持ちも感じなくなる	問6④ 認知症になると、いろいろな気持ちも感じなくなる
問7⑤ 自分の家族が認知症になったら周りの人に知られたくない	問6⑤ 自分の家族が認知症になったら周りの人に知られたくない

表1 質問項目一覧表

C. アンケート結果

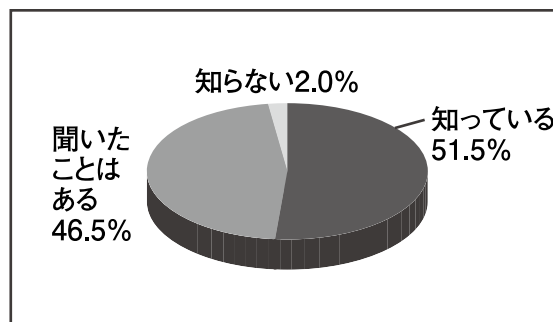
アンケートの有効回答数は 297 名であった。

授業前のアンケート項目の順に結果を示していく。前後で同じ項目の部分については、その比較を示していく、その後に、授業後のみの質問項目について順に示していく。

1) 授業前のみの項目

問 1 『認知症について知っていますか？』

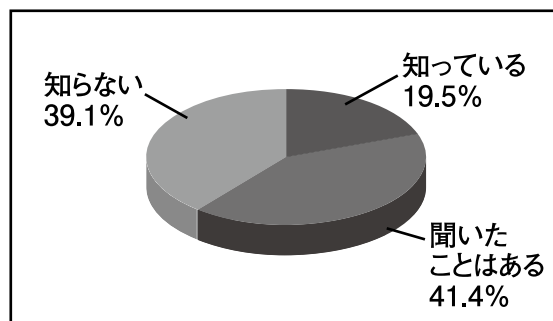
回答	人数
知っている	153
聞いたことはある	138
知らない	6
合計	297



認知症について「知らない」という人は2%で、「認知症」という言葉についてはほとんどの生徒が知っている。

問 2 『若年性認知症について知っていますか？』

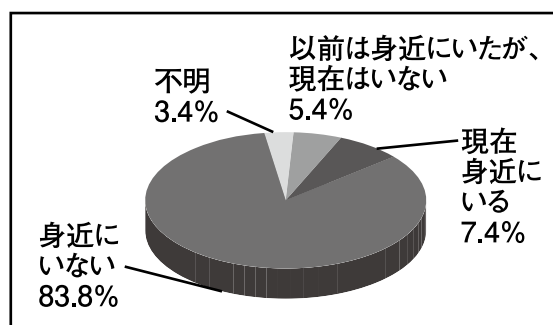
回答	人数
知っている	58
聞いたことはある	123
知らない	116
合計	297



“若年性認知症”については、「知らない」と答えた生徒が約 39% で、問 1 に比べるとかなり多くなる。

問 3 『ご家族、ご親戚などあなたの身近に認知症のかたはいますか？』

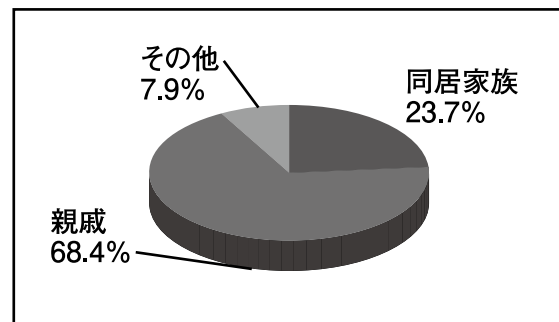
回答	人数
以前は身近にいたが、現在はいいない	16
現在身近にいる	22
身近にいない	249
不明	10
合計	297



約84%の生徒は身近に認知症の方がいたわけではなく、実際に接したことはないことがうかがえる。

問4『問3で「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」と答えた方がお答えください?』

回答	人数
同居家族	9
親戚	26
その他	3
合計	38



認知症の方が「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」という生徒の中で、同居していた経験のある人は約24%である。対象者全体でみた場合、認知症の人と同居した経験のある人は3.0(9人/297人)%とごくわずかである。

問5『あなたの認知症に対するイメージを書いてください(自由記述)』

以下は、自由記述の抜粋である。

●問3で「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
灰色
こわい
介護が大変そう。
しゃべるのが難しい。物忘れが激しい。
単なる物忘れではなく、病的な物忘れ。
今さっき話していた事を何度も聞き直す。自分がやったかのように言う。忘れやすい。
忘れることが多くなる。感情が入りすぎて怒ることが多くなる。
物忘れがはげしくなって大変だし、記憶がないことが一番になっている人は苦痛だと思う。
夜中に突然家を抜け出したりして大変。
一人で生活しているイメージ。何もわからなくて苦しいイメージ。
自分がしてきたことを丸々忘れてしまう。トイレの場所や自分の部屋を間違えてしまう。フラフラとどこかに出掛けていってしまったりする。
怒りっぽい、ポーっとしている。自分がすべて正しいと思っている。間違っても気づかない。病院を嫌う。
脳梗塞の後遺症として言語障害や飲み込みが難しくなったり、家族の名前などがわからなくなる病気。
ボケてきて、前までできていたことができなくなったり、人のこととか物忘れが厳しくなること。
忘れてしまうというよりも、わからなくなってしまう感じ。祖母が私のことを忘れてしまうと考えるとすごく嫌。
何度も同じ事を聞いてしまったり、自分ではわかっているのに、言いたい事を言えずに心の底にしまってしまう。

●問3で「3.身近にいない」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
物忘れとかがすごい。
ボケるみたいなイメージ。
何回も同じ事を聞く。ご飯を食べたのに食べていないと言う。
今までの記憶がどんどんなくなって、介護してても忘れられて寂しいイメージ。
物忘れがひどくて、最終的には人の顔や名前も忘れてしまうイメージ。
家族や周りの人が大変なイメージ。
本人も周りもとても困ってしまう。
認知症に対するイメージは、すぐいろいろな事を忘れてたり、道に迷ったりしているイメージが、私はとてもあります。それに、同居家族の皆さんが大変なイメージがあります。
かわいそう。どうにかしてあげたい。
物事をすぐに忘れてしまう。何回も同じ事を聞く。お年寄りは大半認知症になっている。
相手にするとウザそう。
認知症は物忘れとは違う。一回言ったことは忘れてしまう。いろいろな事に興味を持たない。何回も同じことをやってほしいと言う。一日決まった菓を何回も飲んでしまう。
大変そう。少し迷惑。
あまり良いイメージではない。ちゃんにご飯を食べさせても、食べてないと言う人もいると聞いたことがあります。このようなことがあると、近所付き合いもいろいろなイメージとして悪くなるのではと思います。本人もかわいそうだと思うし、家族もかわいそうだと思います。
認知症はその本人がとても大変なイメージ。
記憶を消しゴムで消される感じだと思う。赤ちゃんみたいになっていく。
一人では生きていけなくなる病気だと思う。
何かすごく周りからのイメージが悪そう。とりあえず何かの悪い病気みたいな。
何か自分が知っている人が壊れちゃって悲しい。根気よく付き合わないといけない。大変な病気。
大変そう。認知症にはなりたくない。絶対辛いと思う。今までのことを全部忘れて、時々思い出して、みんなに迷惑をかけて…なんて絶対に嫌。困らせるくらいなら死にたい。でも周りが認知症になったら、今みたいに穏やかに接しようなんて思えないと思う。
認知症になると記憶がなくなったり、忘れやすくなったりすると聞いたことがあるので、介護者が娘だとしても、その記憶がなくなってしまうので、悲しいと思う。介護が大変そう。

身近に認知症の人がいた生徒とそうでない生徒ともに物忘れという記述が多かった。身近に認知症の人がいた生徒が挙げている具体例は、実際に日々見聞きしているものなのだろうと思われた。

また、身近に認知症の人がいた生徒とそうでない生徒ともに、本人の辛さや周りの辛さにも目が向いていたり、本人の辛さを思う記述がある反面、negativeなイメージが先行しているものも多かった。メディアによって認知症に触れる機会が多くなっていると思われるが、大変な病気であるという印象も強くなっていることがうかがえた。

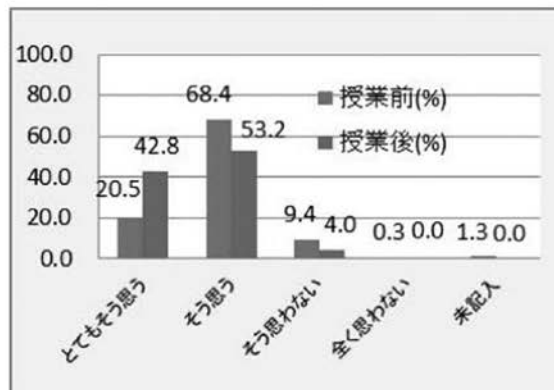
2) 授業前後での共通項目

問 6 (授業前) : 問 4 (授業後)

『認知症の基本的なことについて、高校生ぐらいの年齢の人たちも知っている必要があると思いますか?』

	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
とてもそう思う	61	20.5	127	42.8
そう思う	203	68.4	158	53.2
そう思わない	28	9.4	12	4.0
全く思わない	1	0.3	0	0.0
未記入	4	1.3	0	0.0
合計	297	100.0	297	100.0

88.9
96.0

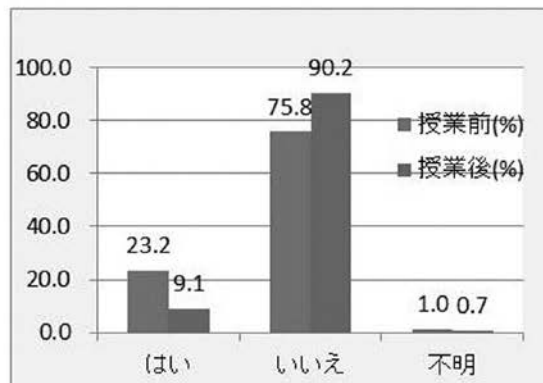


授業後のほうが、認知症のことについて知っている必要があると感じている生徒（「とてもそう思う」「そう思う」）が増加している。

また、授業後では「とてもそう思う」という生徒が増加している。

問 7 ① (授業前) : 問 6 ① (授業後) 『認知症は物忘れと同じである』

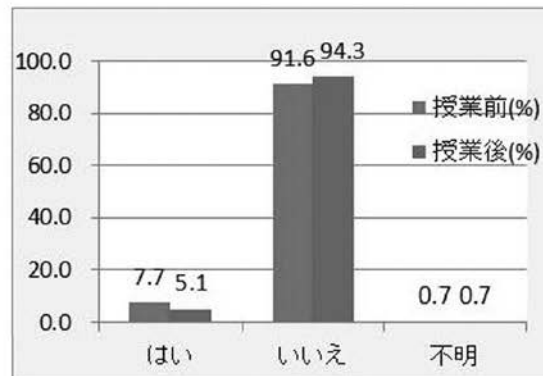
	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
はい	69	23.2	27	9.1
いいえ	225	75.8	268	90.2
不明	3	1.0	2	0.7
合計	297	100.0	297	100.0



授業後のほうが、認知症が単なる物忘れでないことへの理解が進んでいる。

問 7 ② (授業前) : 問 6 ② (授業後) 『認知症になった本人は何もわからないから楽である』

	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
はい	23	7.7	15	5.1
いいえ	272	91.6	280	94.3
不明	2	0.7	2	0.7
合計	297	100.0	297	100.0

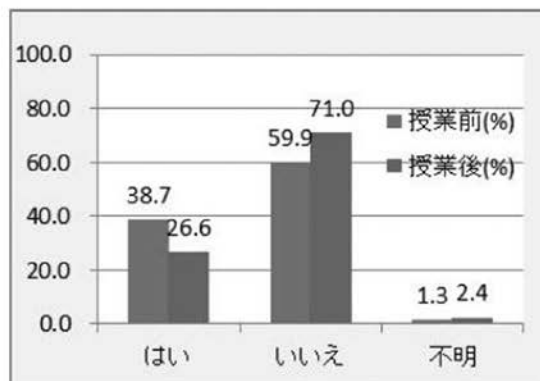


授業前後ともに、認知症の人自身も辛いということを理解している。

問7③（授業前）：問6③（授業後）

『認知症の方には子どもと接するように接したほうがよい』

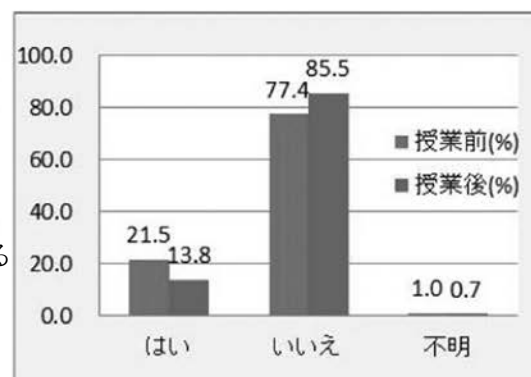
	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
はい	115	38.7	79	26.6
いいえ	178	59.9	211	71.0
不明	4	1.3	7	2.4
合計	297	100.0	297	100.0



授業後のほうが、「子どもと接するように接した方がよい」という生徒が減ってはいるものの、1/4の生徒は「子どもと接するように接した方がよい」と捉えている。「子どもと接するように」ということは、優しいことであると理解している可能性がある。優しい気持ちを持ちながら、尊厳を持った大人として接することが大切であることをうまく伝える必要がある。

問7④（授業前）：問6④（授業後）『認知症になるといろいろな気持ちも感じなくなる』

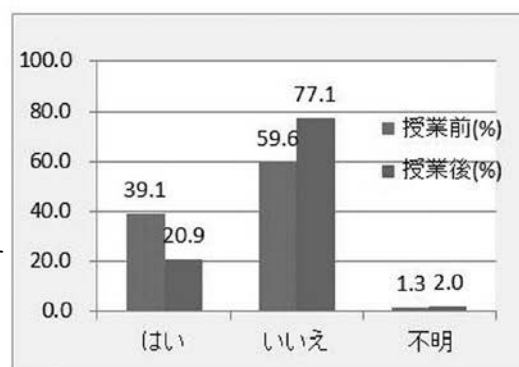
	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
はい	64	21.5	41	13.8
いいえ	230	77.4	254	85.5
不明	3	1.0	2	0.7
合計	297	100.0	297	100.0



授業後のほうが、認知症の方の感情が生きていることへの理解が進んでいる。

問7⑤（授業前）：問6⑤（授業後）『自分の家族が認知症になったら周りに知られたくない』

	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
はい	116	39.1	62	20.9
いいえ	177	59.6	229	77.1
不明	4	1.3	6	2.0
合計	297	100.0	297	100.0

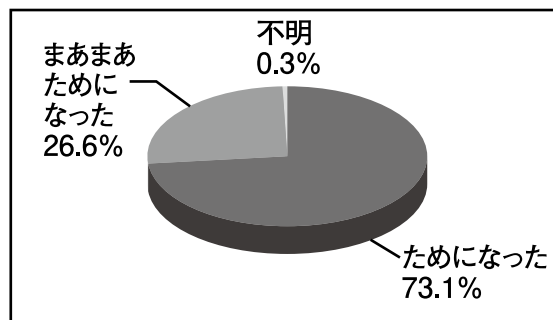


授業後のほうが、家族が認知症なったことを隠しておきたいといった抵抗感が和らいている。

3) 授業後のみの項目

問1『認知症の授業はためになりましたか?』

回答	人数
ためになった	217
まあまあためになった	79
不明	1
合計	297



「ためになった」「まあまあためになった」

で99%以上を占め、ほとんどの生徒がためになったと感じている。

問2『問1で「ためになった」「まあまあためになった」と感じた理由を書いて下さい』

(自由記述)』

●授業前の問3で「1. 身近にいたが、現在はいない」「2. 現在身近にいる」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
認知症というのは、病気とかじゃないと思っていたけど、病気だった。
認知症のことをぜんぜん知らなくて、だけど話を聞いて、少しは知ることができたから。
認知症はどれだけ大変かわかったから。
すぐに忘れてしまうとか、急に怒ったりしたり、静かになってしまうことを知りました。
介護保険というのがあるんだとわかった。
認知症がどんな病気が詳しくわかったし、対応もわかった。
認知症には種類があって、それによって症状がまったく違うことがわかりました。
親戚が認知症だから、会った時の対応の仕方がわかった。
年寄りの人と優しくする大切さがよくわかった。
将来親がなった時とかに、このパンフレットを見たらためになると思う。
自分も介護士になりたいので、将来のためになった。
認知症の人も本当はとてもつらい事がわかった。
祖父が認知症なので、だいたいわかってはいたが、もっと詳しく知れたし、何度も聞かれることは仕方がないのだと、改めてわかりました。また、私のことを忘れたのではなく、「再生」がうまくできていないだけだとわかりました。
知っていたつもりだったけど、こういう授業をしてみて、自分をもっと理解すべきだと思った。自分も家族も、ならないわけではない。

認知症の人が身近にいても授業を受けることで新しい発見があったり、誤った理解をしていたことへの気づきがある。また、祖父母など具体的な相手への接し方を考えるきっかけにもなっている。

●授業前の問3で「3.身近にいない」と答えた人の回答の抜粋

自由記述内容
自分が思っていたこととぜんぜん違ってビックリした。
いろいろ誤解していたところがあったので、正しい情報を知れたから。
認知症の人に対して、どのような言葉、行動をとったらよいのか、少しわかりました。
理解しているのと、いないのではぜんぜん違う。
祖母がもし認知症になったら、最初は受け入れるのは絶対嫌だと思ったけど、ちゃんと理解してやっっていこうと思いました。
周りで認知症の人がいたら、助けてあげたいと思った。
認知症の人のイメージが変わった。悪気があつてやっているわけではないとわかった。
物事について認識できていなかったりするけど、ちゃんと気持ちや感情がしっかりあることがわかった。
怒ってばかりで介護する家族はストレスがたまりっぱなしだと思っていたが、認知症の人もストレスがたまるんだと思いました。
今、一緒に住んでいる祖母がもし認知症になってしまった時、私はどう対応すべきか、認知症とは何かを知れたからです。
自分が二世帯住宅に住んでいるので、近い将来祖父母が認知症になったら、自分も無関係ではられないので。
自分は介護する立場にも、認知症になる立場にもなることがあるので、このような授業はもっとやるべきだと思った。
認知症の人はいつも悪者みたいになってたけど、本当に時間や場所がわからないんだと思った。認知症にもすごくたくさんの種類があつてびっくりした。
将来介護する人になろうか、進路に迷っているから。いろいろ聞いてよかった。認知症について、いろいろ知れてよかった。
認知症にもいろいろな病気があることも知れたし、どういう人が認知症で、認知症の人にもたくさん不安をかかえてることがわかった。
私が認知症に思っていた事とかが、悪い事ばかりだったけど、今回の授業で認知症の人も辛いんだと思いました。薬も知れたりできたので、ためになったと思います。
認知症になった人の家族はいろいろ頑張らなくてはいけないんだと思った。幻覚やうつとかいろいろなってしまうんだと思ったから、私の家族はなつてほしくないと思いました。
認知症になっている人の介護者が、こんなに苦しみを受けていたということを初めて知ったからです。でも私の身近にもし認知症の人がいたら、助けてあげたいと思います。
認知症の人がいたら、どう接しようかと常々考えていたけど、こんな感じでいいのかと答えが見つかった。

認知症のことが前よりもわかったというだけでなく、祖父母や両親がなった場合など自分に引き寄せて考えたり、それまで認知症に対して抱いていた誤解がなくなったということも含め、様々なことを感じている。

問5『認知症に関して、皆さんが知っていたほうがいいと思うことや、もっと知りたいと思うことなどについて書いてください(自由記述)』

●「知っておいたほうがいいと思うこと」の抜粋

自由記述内容
認知症と物忘れは別物。
認知症は病気である。
認知症にかかっても、昔の記憶は中に残っているという事は知っておいてほしい。
たとえ現在のことは忘れても、過去にあった事は思い出せることを知ってほしい。
日常生活の障害は知っておいた方がいいと思います。
認知症の方と接する時の注意とかは、知っておいた方がいいと思います。
介護保険は絶対知っておいた方がいいと思う。
認知症に人には優しく話してあげること。
認知症の人に対して、あまり怒らずに優しく接することが大事だと思いました。
認知症になっている人も、それを介護する家族もとても大変だということ、その大変さ。
認知症になった本人も決して楽なわけではないこと。介護する人も楽ではないこと。
認知症になっている相手の気持ちをわからなければいけないと思うので、その相手の気持ちを知ることです。
認知症の症状の事だけでなく、介護する人の事をもっと授業に入れてもよいと思った。
私達の対応で、認知症の人たちは長生き、回復とかするんだとわかりました。
認知症の方も苦労していることを知った方がいい。
認知症の人はなりたくてなっているわけではなく、認知症になって、その人自身も苦しんでいるということを、皆がわかってあげた方がいいと思いました。
今日習ったことは、みんな知っていた方がいいと思いました。また、自分以外になってしまった人がいて、自分が介護している時の辛さが、もっと伝わると思いました。
その人に合った接し方があるし、その人によって違うこともあるので、いろいろな人にもっと知ってもらいたい。
自分はどういうことができるのか、知った方がいいと思った。
非薬物療法と薬物療法は合わせて使うことによって効果があるということは、皆知っていた方がいいと思う。
認知症にすごくたくさん種類があるのは知っておいた方がいい。記憶がないだけではなくて、反社会的行動もしてしまうこと。

認知症は病気であることや、認知症の人やその家族も辛いこと、認知症の方への接し方を知っている必要があることなど、授業を行う際の実施者側の伝えたいことを受け取っていることがうかがえる。授業前の認知症に対するイメージの内容に比べ、認知症の人や介護する家族の立場にたとえている視点の転換も見られ、若い世代も認知症に関する正確な知識を持つことの必要性がうかがえる。

● 「もっと知りたいと思うこと」の抜粋

自由記述内容
認知症という病気のことについて、もっと理解を深めたい。
認知症の人への対応をもっと詳しく知りたい。
認知症の方に対する接し方をまだわからないので、知りたいと思いました。
認知症の人の症状をもっと知りたいと思った。
認知症の人に対する話し方などを、もっと詳しく教えてほしいと思った。
どう対処すればいいのか具体的に。治すことはできるのか。なぜ、なってしまうのか。
認知症の人に対する接し方など、もっと知りたいと思いました。どうしたらお互いが大変ではないようにできるのか知りたいです。
徘徊中に疲れたからかわからないけど、道に座ってしまっていたら、どうすればいいか。
進行を遅くする方法があるか。
どうしたら認知症の人がストレスをたまらなく過ごせるか。
家族はどうすればいいのかがもっと知りたい。
もっと知りたいのは、介護する家族のケアについて。
認知症はなる人も介護する人も辛いと思うので、予防の方法などをしっかり学びたいです。
介護をしていてうれしいエピソードとか。
認知症のお年寄りに会ってみたい。かかわらないとわからない。
認知症の方との一日どういう交流をするのか、みたいな感じで、職員の一日の流れを見てみたい。

認知症に関して少し知ることで、認知症の症状や、コミュニケーションの取り方など、介護する家族のこと、予防のことなど更に詳しく知りたいと感じている。「介護をしていてうれしいエピソード」を知りたいということも挙げられ、肯定的側面を伝えることで、新たな介護の捉え方にもつながると思われる。また、より理解を深めるために実際に認知症の人と接してみたいという気持ちを抱いている生徒もいた。

D. 考 察

「認知症」という言葉に関しては「知らない」と答えた生徒が約 2% であるのに対し、「若年性認知症」に関しては、約 39% と増加する。認知症は高齢者の病気というイメージが強いが、今回の対象者である高校生の親も罹患する可能性はある。認知症について知ってもらう際に、若年性認知症についても触れることは若い世代への啓発という意味でも重要である。

生活状況の変化により、高齢者と同居する世帯は減少している。今回の調査でも、身近に認知症の方がいた生徒は全体の約 13% であり、同居した経験のあるものになると全体の約 3% とごくわずかであった。そのため、生徒達が抱えている認知症のイメージは、実体験に基づくものというより、マスメディアや書籍などによるものと考えられる。

認知症の高齢者が身近にいた生徒が挙げている具体例は、実際に日々見聞きしているものなのだろうと思われた。身近に認知症の人がいた生徒とそうでない生徒ともに、本人の辛さや周りの辛さにも目が向いていたり、本人の辛さを思う記述がある反面、**negative** なイメージが先行しているものも多かった。しかし、生徒の約 89% は「認知症の基本的なことについて高校生くらいの人たちも知っている必要がある」と授業前から考えており、認知症の関する正確な知識を伝えることは重要なことである。

認知症に関する具体的な理解も授業後のほうがパーセンテージが増加しており、「自分の家族が認知症になったら周りに知られたくない」という抵抗感も和らいでいる。具体的なレベルでも授業を受けることで、よい影響がみられる。

「認知症に関して知っていたほうがいいと思うこと（自由記述）」で生徒が挙げた「認知症は病気であること」「認知症の人やその家族も辛いこと」「認知症の方への接し方」といったことは、今後このような取り組みをする際に、より丁寧に伝える必要がある。また、認知症に関して少し知ること、更に詳しく知りたいと感じるようで、「症状のこと」「より具体的なコミュニケーション」「介護する家族のこと」などが「もっと知りたいと思うこと（自由記述）」としてあがっている。更には、より理解を深めるために実際に認知症の人と接してみたいという気持ちを抱いている生徒もおり、「知る」という行為が、更なる興味・関心や問題意識の芽生えにつながっている。

E. ま と め

日本は既に超高齢化社会で、認知症の患者数は今後ますます増加する。若い世代は、多くの認知症患者と向き合わなければならない世代でもある。

アンケート結果では、授業後のほうが認知症への理解が進み、問題意識も芽生えていた。このような授業を行う取り組みは、若い世代の認知症への意識の確認もでき、意識の変化にもつながることが示唆された。

授業後

認知症に関する授業を受けていただいたみなさんにお尋ねします。

以下の質問にあてはまるところに○をつけたり、()の中に記入してください

問1 認知症の授業はためになりましたか？

1. ためになった 2. まあまあためになった
3. あまりためにならなかった 4. ためにならなかった



問2 問1で「1」「2」に○を付けた人への質問です

「1.ためになった」「2.まあまあためになった」と感じた理由を簡単に書いて下さい

()

問3 問1で「3」「4」に○を付けた人への質問です

「3. あまりためにならなかった」「4. ためにならなかった」と感じた理由を簡単に書いて下さい

()

問4 認知症の基本的なことについて、高校生ぐらいの年齢の人たちも知っている必要があると思いますか？

1. とてもそう思う 2. そう思う 3. そう思わない 4. 全く思わない

問5 認知症に関して、皆さんが知っていたほうが良いと思うことや、もっと知りたいと思うことなどについて書いて下さい

()

問6 以下の質問について、「はい」「いいえ」のどちらかに○をつけてください

- | | | |
|------------------------------|----|-----|
| ① 認知症と物忘れは同じである | はい | いいえ |
| ② 認知症になった本人は何もわからないから楽である | はい | いいえ |
| ③ 認知症の方には、子どもと接するように接したほうがよい | はい | いいえ |
| ④ 認知症になると、いろいろな気持ちも感じなくなる | はい | いいえ |
| ⑤ 自分の家族が認知症になったら周りに知られたくない | はい | いいえ |



平成24年度 認知症介護研究・研修大府センター研究報告書(研究部)

施設における認知症高齢者のQOLを高める新しいリハビリテーションの普及に関する研究事業
-「にこにこりハ」「いきいきりハビリ」の普及-

BPSDを呈する認知症高齢者への非薬物療法に関する研究
-環境設定のためのパラメトリックスピーカーの有用性-

シングル介護者(現役世代で独身の介護者)が抱える課題の抽出とその支援策に関する研究事業
認知症に関する地域づくりを推進するための若い世代への認知症啓発に関する研究事業

発 行：平成25年3月

編 集：社会福祉法人 仁至会

認知症介護研究・研修大府センター

〒474-0037 愛知県大府市半月町三丁目294番地

TEL(0562)44-5551 FAX(0562)44-5831

発行所：常川印刷株式会社

〒460-0012 名古屋市中区千代田二丁目18番17号

TEL(052)262-3028 FAX(052)262-1085